

# 金沢大学角間キャンパスの山間寺院

佐々木 達夫

## 研究会開催の趣旨

二十世紀末、金沢大学は金沢城跡地から金沢市郊外の山間部に移転した。移転に伴っていくつかの遺跡がキャンパスから発見され、発掘調査等が実施された[貞末他 1989, 佐々木他 1995, 1996]。現在、角間キャンパスに保存されているのは角間遺跡とよばれる、小さな谷を挟んだ学生寮建設予定地地点と第2調整池南地点である。二つの地点は同時代の遺跡であり、一つの遺跡を形成すると考えている。学生寮建設予定地地点からは「一乗」の墨書土師器碗が出土し、一乗寺院跡と推定する根拠となった。金沢大学角間キャンパスで現地保存された唯一の埋蔵文化財であり、地域の歴史を具体的に知る接点として文化財保存理解の場として、大学の教育研究に積極的に活用したいものである。

研究会では金沢大学キャンパス内遺跡を中心的な例としながら、北陸各地の山間寺院を地道に研究している方々、全国的な視野で山間寺院を研究している方々から、山間寺院の調査や研究成果等をお聞きすることとした。北陸地方の遺跡を中心に角間遺跡と比較検討を行いながら、山間寺院とは何か、角間遺跡の歴史的意義はどのようなところにあるか、などを考えることとする。研究会開催は2001年6月9日、古代学協会北陸支部、金沢大学埋蔵文化財調査センター、金沢大学文学部考古学研究室が主催し、金沢大学文法経学部第1・2会議室で開催された。

研究会テーマは「北陸の平安時代・山間寺院を探る」であり、発表者と題目は次の通りである。

江谷寛(古代学研究所・古代学協会)「山間寺院の特質」

久保智康(京都国立博物館)「平安時代の山林寺院と越前の遺跡」

佐々木花江・岩田安之(金沢大学埋蔵文化財調査センター)「金沢大学角間遺跡・一乗寺跡の発掘」

垣内光次郎(石川県埋蔵文化財センター)「南加賀の山間寺院」

松山和彦(石川県埋蔵文化財センター)「能登・北加賀の山間寺院遺跡」

久々忠義(小矢部市教育委員会)「越中の山間寺院遺跡」

笠井純一(金沢大学文学部)「文献が語る平安時代の葬送」

討議・古代山間寺院の歴史的諸問題 司会・佐々木達夫(金沢大学文学部)

研究会開催の趣旨と討議項目などは次のように考えた。日本では飛鳥時代に寺院建立が始まり、奈良時代から平安時代前半に全国的に寺院が建立され始めた。寺院の造られた場所は平地ばかりでなく山地にも見られる。とくに平安時代後半は日本各地の山地にも小さな寺院が建立された時代であった。山地・山間に小寺院が建立されたのはなぜか。その時代背景はどのようなようであったか。山間寺院の立地や景観、施設の構造等からみた特徴はなにか。発掘された金沢大学キャンパスに残る山間寺院一乗寺遺跡を例に取り上げながら、北陸の山間寺院の具体的な平面構造や出土品を比較検討し、さらに全国規模で進んでいた同様の小さな寺院建立の動きと比較しながら、平安時代の地域史のなかで発掘された遺跡や遺物のもつ歴史的意義を討議することを目的とする。

北陸地方の山間寺院および関連遺跡の図表は図1, 表1(佐々木・岩田 第1図, 第1表)に示した。例えば能登の山間寺院として宿向山遺跡、行場として福水寺家山遺跡。加賀の山間寺院として三小牛ハバ遺

跡、浄水寺遺跡、村落内寺院として高堂遺跡など松任市内の数カ所の遺跡。医王山の富山県側の山間寺院と行場。越前の明寺山遺跡等。こうした例が地域の代表的なものとして説明されたが、それらの遺跡をどのように歴史的に説明するか、点として大地に刻まれた遺跡を結び解釈する見えない糸を張り巡らす試みが行われた。北陸内部の歴史地理的な検討の他に、全国的な視野からの比較検証も行われ、今回の研究会では北陸地方の特徴の一端を浮き上がらせることとなった。

次に、各発表要旨を紹介し、いくつかの問題点を取り上げることにする。各発表者の要旨は研究会場でメモしたものであり、私の問題関心で記した部分が多いと思う。それぞれの発表の詳細は各発表者が論文として『金沢大学文化財学研究』3・4号に提出することを研究会場で要請した。

## 発表の要旨

### 江谷寛

如意寺は標高400mに築かれ、広い範囲に堂が散在する。平安京内には寺が造れなかった。しだいに京内や京外にも寺院造営が行われる。如意寺は描かれた絵図が残る。本堂、講堂などの発掘調査も実施され、絵図に残る伽藍配置と発掘された遺構がよく合う。造成法は丘陵を四角に削り、その土砂を前に埋める。版築をする。平泉毛越寺、談山神社なども同じ造成法をしている。埋める土砂内に10世紀前半の緑釉陶器（滋賀県加茂遺跡で作られたもの）、青磁、白磁、灰釉陶器、土師器皿等の破片などが含まれ、再造成の時期も推定できる。絵図によると、本堂は檜皮葺き、三重の塔は瓦葺きである。三重の塔の前から瓦が出土した。本堂（金堂、講堂）の前に、常行堂、法華堂がある。伽藍配置は他の山間寺院でもみられる。如意寺からは眺望が開けており、敵の動きもつかめたのだろうか。山間寺院の特徴は、絵図と発掘の成果から、平坦面の造成法や伽藍配置に現れるだろう。講堂を中心にセットとなる建物がある。山間寺院は平地寺院と対になるものである。麓の寺院と対になる山寺が山間寺院であることが奈良を中心にかかる。例として法隆寺と松尾寺。宇治平等院と禪定寺がある。セットの寺を僧侶が行き来する。如意寺は園城寺（三井寺）と対になる。この特徴が北陸にもみられるだろうか。

### 久保智康

山林修行を重視し、山林寺院と呼ぶ。分布と時代を中心に考える。伽藍配置などは類型化が難しいが、成立や存続の時期は類型化できる。8世紀中頃から9世紀前半に、平泉まで全国的に広がる。短期間で廃絶する寺、12世紀以降に拡大発展する寺と2分類できる。拡大する寺は、国府と関連するものである。国や郡の境目や交通路に沿う位置にある。官が安全などの祈願で、地域の寺に本尊を置かせたか。そうした寺は廃絶せず、継続するのだろうか。12世紀は白山信仰の寺が形成され始めた時期である。本尊のセットなどもこれに伴う。中央の天台・真言の寺と関係を結ぶと、地方の寺は財政的に楽になる。中央にとっては、荘園制の進展のなかで地方の山間寺院を利用したのだろうか。天台特有の伽藍配置は少し遅れて広がったか。平地寺院では金堂が中心だが、山林寺院では講堂が中心になる。金堂から講堂へ変わるのが、山林寺院の特徴である。本尊を講堂へ移し、修行や法要なども講堂で行う。白鳳期から続く基本的な伽藍配置が山の上でも見られ、俗地からの隔離という面が山林寺院の特徴となるという上原説あり。しかし、久保説は違う。仏地と僧地の関係が変わるといふ。平地寺院の伽藍配置と山林寺院の配置は違う。僧侶の主体性が反映された配置である。僧地的建物である講堂がもっとも奥の平坦面にある。仏地的建物である金堂、本堂、塔は、山林寺院では奥にない。また、俗地と聖地の間に、さらにもう一つ別の空間が存在したのではという疑問を呈する。12世紀頃に廃絶する遺跡があるという表が研究会主

催者から提出されたが、それはその遺構が廃絶されたのであり、寺域全体では継続と考えた方がいい。里の山の信仰空間を広く見る。平地からすぐ見える形のよい山が信仰の対象になっていた。山寺だけで見ず、そうした山全体で考えると見えてくることがある。初期山林寺院は、平地から少し隠れた位置にあるのが特徴である。聖地である寺からも俗所が見えない。しかし、里の人との関わりがある。里で人と交わることが行の一つとなる。例えば薬師如来など病氣平癒をする。阿弥陀は往生を願う。尊種の組み合わせは三体セットが多い。十一面観音、薬師如来、三所権現像、など。それぞれの寺が棲み分けをしていたか。いくつかの寺群で法要する場合もあったか。

### 垣内光次郎

南加賀地域では山間寺院として5遺跡が発見されている。谷間を入り込み、平地から見えない地点で切盛造成している。一般的にはこうした説明でいいが、それに当てはまらない遺跡もある。その理由は何か。寺院内での活動を考える。10世紀前半までは加持祈祷と写経活動を行った。代価も得られる。寺を建立した経済的パトロンは在地有力者、あるいは官に勤めていた在庁か。郷単位に神社が存在したであろうから、里から見える位置にあるのは寺院ではなく神社であろうか。浄水寺は8世紀後半から15世紀中頃の山間寺院である。4段造成し、掛け造りである。礎石の堂は火災後に掘立柱跡の堂になる。その後さらに再建された礎石の堂が続く。大きな寺院であり、在地だけではなく、別の支持者がいたか。墨書は吉祥の文字が多い。分配のために数個に1個墨書したか。越窯跡、白磁、長沙窯跡、緑釉、灰釉が出土している。これらの陶磁器を金属器の代わりに儀式に使ったか。写経活動から、堂ができると別の活動に変化したか。里川E遺跡は9世紀後半の遺跡である。掘立柱跡から礎石の堂に変化したようで、左右に小規模の掘立柱跡建物がある。滝谷寺院遺跡は礎石建物である。宮竹うっしょやまA遺跡は8世紀後半から12世紀前半の遺跡で、掘立柱跡建物、礎石建物、竪穴住居がある。鉄鉢が出土した。八里向山B遺跡は9世紀前半で20mの低い山の上であり、周りからよく見える場所である。建物配置からみても、寺院ではなく神社の可能性のほうが高いだろう。

### 松山和彦

能登・北加賀の山間寺院遺跡を伽藍配置等によってA～Iに類型化する（戸澗質問、周辺環境も含めた方がいいか。小嶋質問、石動山をどう考えるか）。Aタイプは1つの堂で構成される。小テラス(10m四方)に建物1棟。周辺の村と結びつく堂か。常駐の僧侶はいない。儀式だけが執り行われる。村の下方にある。修行の場ではないだろう。山間寺院には入れない方がいいか。Bタイプは、主要堂宇に2棟程度の建物があるタイプ。テラスはやや広くなる。Cタイプは、主要堂宇を中心に僧房が取り囲むタイプ。小松市の浄水寺。Dタイプは、本寺に付属した修行のための山寺。山中の平場に建物が整然と配列される。僧地ははっきりしているが、仏地がはっきりしない。三小牛ハバ遺跡は末松廃寺との補完関係があるという戸澗説あり。Eタイプは、本格的に整備された山林寺院。加賀国における真言別院としての高雄山寺。Fタイプは、延喜式内社の神宮寺。Gタイプは生産遺跡に仏教色がみられるもの。小鍛冶、土師器窯跡が伴う。大寺院が伽藍を維持するため、丘陵の一角で修行者が手工業生産に従事した。Hタイプは山中の修行地。倉ヶ岳山頂南遺跡や医王山・三千坊跡。Iタイプは、その他で特筆すべきもの。福水ヤシキタ遺跡。古代山間寺院遺跡の背景。8世紀後半以降は神仏習合が展開するなかで神宮寺が成立する。北陸では西部で早い例がある。純密の波及と白山信仰の展開。寺院遺跡の断絶と継続。8世紀後半から9世紀までのものは10世紀に断絶するものが多い。寺院遺跡を支える集落遺跡も同様の傾向をたどる。伝統的な在地有力者の没落。10世紀以降平安後期に盛んになるものは中世まで継続することが多

い。10世紀から来世の救済と現世利益を求めて観音信仰が盛んになる。加賀では白山信仰のネットワークに組み込まれながらも、独自の地方霊場として命脈を保つ。聖の活動拠点か。

### 久々忠義

越中の山間寺院は、7世紀末～8世紀、9～10世紀、11～16世紀、江戸時代の遺跡に分けられる。低い丘陵中腹の谷間に立地するものが多い。医王山周辺の遺跡群について施設構造などの特徴を述べ、仏教関連遺物、寺名墨書土器、祭祀遺物、鉄滓等が出土していることも紹介した。こうした遺跡は平地にある郷（集落）と関わりのある山の遺跡として捉える。

### 笠井純一

文献史料にみる平安時代の葬送儀礼については、中央の貴族に関して史料があり、地方の民衆等に関しては史料がない。10世紀末以降の官人、貴族に関する史料を使う。藤原氏の木幡の場合、墓が先でそこに寺ができる。10世紀末～11世紀初頭の葬制について。火葬の場合、霊屋に遺骸を納めて荼毘に付し、遺骨を翌朝埋葬地へ運ぶ。土葬の場合、入棺し、北山辺に土葬する。土葬のための仮屋を造る。1年から数年後、土葬地を掘り改葬する。土葬を改葬するのはいつ頃からか。古墳時代末から始まり、奈良時代、平安時代にも一般的に行われていた。火葬と土葬の別は本人の遺言によることが多い。一般庶民や子供（貴族の子供も含む）は鳥辺野、東山あたりに遺棄する。平安時代初期は京の西南が葬送の地であった。平安時代末には火葬でも改葬をするようになる。仮埋葬地、改葬地には結界のため、「釘貫（垣根か）」が設けられる。上物を墓所の良（東北）で焼く。金沢大学角間遺跡には墓があり、周辺に柱穴跡が並ぶ。土坑の東北隅に焦土がある。北陸の山間寺院では墓を伴うものは少ない。北陸東部には石積み墓などがある。墓と山林寺院は関連があるか。

### 討論会発言の一部

**江谷** 平安京周辺は山間寺院と呼んでもいい寺が多数ある。造成方法については北陸でも類似している。僧兵などが造成をしたか。京都でも寺内に白山神社が置かれることがある。中国からの影響もあったか。神宮寺。朝鮮の場合、大規模な寺は山の中に多い。日本の山間寺院と比較できるだろうか。朝鮮は儒教が追われて山内に入ったので、比較は難しい。道教の寺も日本とは比較できないだろう。関西では磨崖仏と山間寺院がセットになる。

**西野** 宮竹うっしょやまA遺跡など。焦土坑から骨片が出土した。南向き斜面に墓が築かれる。角間遺跡も南向きで、掘立柱跡は喪屋だろう。風水思想に則っている。その他、石が5つあったが、置いてあるだけであり、その性格は判断が難しい。

### いくつかの問題

#### 山間寺院とはなにか

なにを山間寺院と呼ぶべきか。なにを山間寺院と呼んでいるか。一般に山にある寺、山寺というイメージでとらえていいのだろうか。現代に至る山寺の起源が奈良・平安時代にあり、中世・近世と変遷してきたのだろうか。山間寺院、山林寺院、山中寺院、山地寺院あるいは山岳寺院などと呼ぶことができるように、名称も問題である。同じ言葉で呼ぶことが不適当な寺があることも事実である。大きな寺、小さな寺、高い山の上の寺、里山のような村近くの寺など様々である。名称を決めるためには実際の寺

の内容や性格を検討することが必要である。平地にある寺を平地寺院と呼ぶことにすると、山間にある寺を山間寺院と呼ぶことになる。実際には特徴のある山間寺院が存在するので、平野にある寺院を平地寺院と呼ぶのである。

山間にある寺は、立地する場所の標高や頂上か山麓かという位置、山地の陰しさ、造成した平面的規模等によって、2つに分類できる。山岳地帯というに相応しい標高の高い場所にあり、やや規模の大きい例が多い寺を山岳寺院と呼ぶのがふさわしいか。この場合、山岳寺院は比叡山や高野山などの巨大な密教系寺院を指す言葉に限るべきであるのか。平地に隣接する比較的標高の低い小さな谷沿いの台地上に位置し、規模の小さい例が多い寺を山間寺院、あるいは里山寺院と呼ぶのが適当であろうか。天台・真言の山岳仏教である密教が俗世間をさけて修行を行ったが、各地に建造された小さな寺院にも影響を及ぼしたか。山林修行、山居禪行を目的とする寺院を、続日本紀にみえる山林寺院と呼ぶのが適当だとの意見もある[近江 1998]。平地に位置する寺は、国分寺などの官寺とその他の民間の寺がある。民間の寺には地域の拠点寺院や村内の里寺院があるのだろうか。それらの平地寺院と比較しながら、周辺村落から少し離れ孤立した小寺院を山間寺院・里山寺院と呼ぶことが適当であるのか。

発掘された構造や地理的景観から、寺院の分類ができるか。標高や比高は、分類基準になるか。施設の規模や配置、出土する仏具等から寺院の分類はできるだろうか。平地の俗地から離れた聖地としての山間に造営されたのが山間寺院であったか。平安時代に天台・真言宗の山林寺院が流行するという当時の仏教のあり方のなかで、小さな山間寺院を説明していいのだろうか。山間寺院・里山寺院は、平地寺院と比較した場合、緑多き清流の谷間の修行の場、禪行の場という性格が強いと捉えるべきか。それとも平地寺院の小規模なものと捉えられるか。久保智康は里の人々の病氣快癒祈禱や雨乞いなども行う山林修行者を考え、里山の信仰空間と捉えている。

こうした問題意識で金沢大学内に残る小さな寺院を理解するために、山間寺院跡に関する討論を司会した。

### 山間寺院の使われた時代は

奈良時代に奈良及び周辺地域の山地に寺が築かれる。奈良時代後半から各地方に広がり、平安時代に各地で山間寺院は多くなる。建立のきっかけと衰退の理由はなにか。北陸地方では、奈良時代後半から平安時代前半に建立されたもの、平安時代後半に建立されたものがあり、その後も継続して存続する寺院もある。時代的な特徴があるようである。規模や立地、出土品から性格などを分けることができるであろうか。周辺の村落の変遷と寺院の盛衰は対応するのだろうか。大きく継続的な村落がある場合、山間寺院の規模も大きくなり、時代的にも継続するのだろうか。

### 地理的広がりの特徴

京都の山岳寺院と呼ぶべき大規模な寺院はやや特殊なものとするべきであろうか。日本全体での広がりとも比べ、北陸地方には特徴が見えるようである。北陸でも時代的な変化があり、小規模の寺院とやや規模の大きな寺院がある。拠点的な寺院は全国的な地理的広がりの特徴があるのだろうか。

### 国分寺や神宮寺と山間寺院の関連性はあるか

8世紀中頃、国分寺が官寺として建立される、その影響で小さな寺の建立がおこるのだろうか。神仏習合思想で神宮寺が建立された。平野の拠点寺院として建立された国分寺と、地理的位置、立地、規模、時代、出土品などの比較を行うことが必要である。官寺の性格と、行の場としての山間寺院との比較を

行う。神宮寺の影響で神と仏が複合した山間寺院ができた可能性があるだろうか。

### 山間寺院と平地寺院との関連性はあるか

官寺に対して民間の寺として建立された寺は、地理的にみると2分類できる。平野の村内の寺院と、山間部に孤立して存在する山間寺院である。寺としての性質が違うのだろうか。江谷は平地寺院と山間寺院が一对となり、修行の場が山間寺院であるという。

### 山間寺院の立地と地理的配置の特徴

村落内ではなく、村落外の台地上に、独立施設として作られる。山間部にあり、村落内にないのが特徴である。しかし、村落からそれほど離れた場所でもない。近くに交通路があり、便利な場所に多い。このような立地を選んだのは、修行のための隔離が目的か、それとも村人が容易に接近できる場所を選んだためなのか。神聖な山が見える、あるいは神聖な山そのものという、聖地に立地したのだろうか。丘陵と平野の境界地帯に立地するようである。樹木を切り払うと、あるいは冬の落葉のころには、見晴らしのよい場所も多い。近くにある山間寺院同士の関連性は考えられるのだろうか。

### 山間寺院の造成方法は

平地から急斜面を上ると平坦面がある。旧地形を利用しながら、比較的簡単な造成を行ったのだろうか。平坦面は削り取って造り、削り取った土砂は斜面下方に堆積させて平坦面を広げたようである。平坦面は何段あるか。造成が行われず、自然地形や自然そのものを修行の場とした場合は何も痕跡が残らないのではないか。その場合、どのような方法で調査研究を進めるか。石窟などは痕跡が残る。こうした造営に関わったのは誰か。僧兵が造営に関わった可能性も考えられるか。

### 遺構の空間的配置に特徴はあるか

発掘された遺跡を検討することで、どのような施設があったかがわかるだろうか。伽藍配置は判明するだろうか。山間寺院として各地の寺院配置に共通的な施設はあるのだろうか。あるいは山間寺院もいくつかのタイプに分類したほうがいいのか。官寺や平地の寺と比較すると、建物の空間的な配置や大きさ、数に特徴があるだろうか。限られた施設である可能性のほうが大きいのか。簡単な施設であると考えたほうがいいのか。同時に立つ建物数はどのくらいか。大きさはどのくらいか。どの方位、方向を向くか。南に開くというような共通性があるだろうか。小さな建物の場合と、大きな建物の場合の違いは何か。利用の目的と関連するだろうか。建物の種類について。掘立柱建物、礎石建物。建物の目的は何か。居住のためか。修行のためか。倉庫か。工房か。いずれも瓦が出土する例は少なく、粗末な草堂的な建物であったか。特殊な建物があるか。宗教的な建物と考えられるか。仏堂があるか。本堂、金堂、講堂があるか。塔があるか。心礎があるか。山間寺院は伽藍配置の中心に講堂があるか。修験道と寺院を区別することは難しいようである。神社と寺院は発掘された遺構から区別できるだろうか。

### 山間寺院の遺物構成の特徴は

仏具の出土状態はどうだろうか。山間寺院から仏具が多量に出土する例はないようである。仏、瓦塔、奈良三彩、緑釉陶器、須恵器鉄鉢、須恵器水瓶、香炉、灯明具、水晶小玉などが出土すると、寺院としての評価はどうなるのだろうか。硯や墨書土器が出土するが、宗教的な文字が書かれる場合があるのだろうか。墨書土器の墨書は写経と関係するだろうか。生活用具がどの程度出土するのだろうか。日常的

な生活の場であったのかが出土品から推定できるだろうか。鉄鉢形鉢は山間寺院で多く出土するのだろうか。金沢大学角間遺跡からは多量の土師器や須恵器と少量の中国陶磁器が出土している。他の山間寺院ではどのような遺物が出土しているのか。角間遺跡と比較し、その普遍性及び特殊性を考えることも必要である。浄水寺では、越州窯青磁（碗・坏・壺）、白磁（碗）、長沙銅官窯（水注）が出土している。こうした遺物は一般の村落からは出土しない。寺院への配給ルートは官からであるのか。

### 山間寺院建立の目的は

平地寺院の補完的な活動であったのだろうか。すなわち平地寺院と山間寺院は有機的な関連を持っていたのだろうか。あるいは平地寺院とは関連がない独自の活動を行っていたのか。平安京周辺に広がる山間寺院は平安京内に住む氏族の寺院であったか。平安京付近にも大きな寺と里付近の小さな寺があった。各地にある山間寺院はだれの寺院であったか。山間寺院は官寺に対立するものであるのか。密教的な修行の場であったか。その場合、平地の寺院から山間に呪術を得る目的で僧侶が修行に来たのだろうか。あるいは一般的な宗教活動の場であったか。近隣の農民を救う活動も併せて行った場であったのか。現状では遺跡からこのような歴史的情報を得る事実は発見されていないのではないのか。

### 山間寺院では生産活動を行ったか

金沢大学角間遺跡では小鍛冶の炉跡と推定できる遺構が発見された。この炉跡からは鉄滓が出土した。この炉跡からではないが、鑪羽口も出土しているため、当地点で小鍛冶活動を行っていた可能性も考えられる。しかし、鍛冶の可能性は低いという意見もある。医王山関連の香城寺惣堂遺跡では、炉は確認されていないが鉄製品や鉄滓が出土している。「製鉄の種類は小鍛冶であった可能性が高く、本例は寺院の経済活動を考える資料」と推定され、遺跡は山麓部における中核的な寺院施設で、香城寺道という古道に沿う可能性があるという[『医王は語る』1993:165]。角間遺跡と立地が似ている例である。山には草木があり、薬草もある。それらの採取と販売による活動もあったか。山間寺院が連続的に並ぶことをみると、見通しの利く地点に位置するから、互いに関係した可能性もある。僧侶が行商や情報の運び屋をしたとすると、その情報ネットワークの駅の役割を果たしたかもしれない。山間寺院は修行の場であり、同時に生産や商売活動の場であった可能性がある。どのように歴史的事実を探り出すか。

### 山間寺院の造営者・建立者はだれか

山間寺院を建立したのは有力在地農民層か、国府などの官の勢力か、大きな中央の寺院であったか、あるいは個人的に修行する僧侶であったか。建立後は誰が寺院の経営を支えたのであろうか。山間寺院でも、大規模な寺院と小規模な寺院では、支持者が違うのではないだろうか。こうした問題も発掘から得られる遺構や遺物から探りにくい問題である。文献資料により期待できる。

### 山間寺院の宗派は

天台・真言宗の系列の寺院が多いか。金沢大学の遺跡から出土した土師器碗の墨書「一乗」は仏教用語で、一乗はいつさいの衆生を成仏させる最上の教法で、特に妙法蓮華教の法門をさすと言われる。平安時代末頃から白山信仰ネットワークのなかに山間寺院が組み込まれ、中世・近世に続く山寺に変貌していく可能性もあろう。発掘された山間寺院の宗派を遺構や遺物から探るのは難しい作業である。

## 金沢大学構内角間遺跡の特質

地元伝承ではイッチョウジという地点から、墨書で「一乗」「寺」と記された土師器が出土した。風倒木の痕跡周辺から土師器がまとまって出土した。こうした点から考えると神仏習合の例となるだろうか。2地点を結ぶ線上の正面には信仰の山であった倉ヶ岳が見える。古墳時代までは土器等の出土から信仰の地として知られるが、この頃には遠くから拝む山になっていたのだろうか。遺跡は浅野川に注ぐ小さな谷の斜面上にあり、浅野川から医王山に通じる交通路に沿う丘上に位置しているともいえる。周辺には当時の村落跡が現在のところ見つからない。小さな谷を挟んで、宗教的な施設と推定できる遺構、小鍛冶の跡かと推定できる遺構がある。斜面上の台地を少し造成して平場を作り、簡単で小さな建物を建てる。掘立柱跡4棟と小さな礎石建物が出土している。大ききの分かる掘立柱建物は6.6×3.7mや約3×2mで規模の小さな建物である。

瓦は出土していない。炉跡1は建物1内にある。炉跡2は建物1と建物2の間にある。ここからは鉄屑が出土し、同じ場所ではないが轆が出土したから、小鍛冶炉の可能性も推定できるが、鍛冶の痕跡としては不十分とする意見もある。ガラス玉の残片も出土した。墓は1基だけある。木棺墓であろう。寺と墓の関係はどのようなものであったか。全国的にみると9世紀前半に墓制の変化があり、流行していた火葬墓から再び土葬墓へ変わるが、角間の墓は土葬墓としていいのであろう。土師器椀と須恵器はどこで造られたもので、年代はいつ頃のものか。あるいはどのような種類が出土しているか等もすでに整理が進んでいる。日常的な生活用具の出土割合は少ないようである。宗教儀式に使用したと推定できる遺物として、灰釉陶器（黒笹90号窯跡）、緑釉陶器、中国の越窯青磁、それにやや時代が下りる中国の青磁も出土している。これらは9-10世紀の灰釉・緑釉陶器、越窯青磁、12-13世紀の中国の竜泉青磁などに分類できる2時期に分かれる。

金沢大学角間遺跡の周辺にはいくつかの山間寺院が存在するが、三小牛ハバ遺跡は川2本と丘陵を越えた場所であり、夕日寺B遺跡や釣部A遺跡は丘陵の反対側に位置する。同じ水系でみると、浅野川下流に瓦葺き大寺院と推定できる兼六園下の広坂廃寺があるが、8世紀頃の寺院と推定され、角間遺跡が建立された頃は廃寺となっていた可能性が大きい。倉ヶ岳は出土遺物から見ると宗教の対象とされたのは古代であり、角間遺跡が存在した頃にはすでに忘れられた山になっていた可能性もある。ただし、宗教儀礼の方法の変化があったであろうから、宗教対象山地に遺物があるかどうかだけで宗教対象であるかどうかを判断するのは危険である。山間寺院が造営された当時の歴史的背景のなかで、地域史の再構築のなかで、角間遺跡を理解する試みはさらに続ける必要がある。

こうした歴史研究対象となる遺跡が文化学問の場である大学内に保存されることは幸いである。歴史を再び実証的に考える実物の存在は後生に残す未来への文化遺産である。研究資料としてばかりでなく学生教育面での継続的活用も期待される。遺跡の保存される位置が海外からの研究者や留学生が滞在する区域内になり、地域文化や日本歴史の理解に具体的で視覚的な情報を提供することにも恵まれている。浅野川側から入る金沢大学の正面に位置するこの遺跡は、金沢大学が歴史を継承しながら未来に発展する文化発信の象徴的存在として大学の歴史的環境価値を深めるものとなろう。

## 参考文献

宇野隆夫、西井龍儀、久々忠義、宮本哲郎、往蔵久雄『医王は語る』

富山県福光町・医王山文化調査委員会:165,1993

江谷寛「古代中世の山岳寺院」『考古学ジャーナル』382:2-4,1994

江谷寛「山岳寺院研究の課題」『考古学ジャーナル』426:2-4,1998



- 近江昌司「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』426:5-8, 1998  
久保智康「北陸の山岳寺院」『考古学ジャーナル』382:11-16, 1994  
久保智康「北陸の山岳寺院（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』426:22-27, 1998  
黒沢彰哉「東国の古代山岳寺院」『考古学ジャーナル』426:16-21, 1998  
佐々木達夫、中村慎一、岩田安之、湯尻修平「金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内埋蔵文化財調査報告・1995年3月」『金沢大学考古学紀要』22: 237-259, 1995  
佐々木達夫、向井互、庄田知充「金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内埋蔵文化財調査報告・1995年9月」『金沢大学考古学紀要』23:1-36, 1996  
貞末亮司編『角間』金沢大学遺跡調査委員会、1989  
出越茂和「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『石川考古学研究会会誌』42:167-186, 1999  
中井均・土井一行「湖北地方の山岳寺院」『考古学ジャーナル』382:5-10, 1994  
林博通「崇福寺と金勝寺」『考古学ジャーナル』426:9-15, 1998

#### 研究会参加者

江谷寛(古代学研究所・古代学協会)、久保智康(京都国立博物館)、松村知也(福井市立郷土歴史博物館)、古川登(福井県清水町郷土資料館)、前田清彦・深川義之(鯖江市教育委員会)、野沢雅人・持田透・酒井中・赤沢徳明(福井県埋蔵文化財センター)、久々忠義・大野淳也・伊藤隆三(小矢部市教育委員会)、北林雅康・津田耕吉(七尾市教育委員会)小嶋芳孝・垣内光次郎・松山和彦・西野秀和・白田義彦・立原秀明・加藤克郎・布尾幸恵・熊谷葉月・田村昌宏・西田昌弘・湯川善一(石川県埋蔵文化財センター)、唐川明史(石川考古学研究会)、戸潤幹夫(石川県立歴史博物館)、田嶋正和(加賀市教育委員会)、布尾和史(野々市町教育委員会)、望月精司(小松市教育委員会)、宮下幸夫(小松市博物館)、堀大介(朝日町教育委員会)、江口友子・田中一穂・田中暁穂(新潟県埋蔵文化財調査事業団)、吉村正親(京都市埋蔵文化財研究所)、釘谷紀(佛教大学学生)、中川あや(京都大学学生)、壺岐一哉・村上雅紀(同志社大学学生)、山野之義(金沢市議会議員)、山本幸子(古代学協会北陸支部)、佐々木花江・岩田安之・井貫昇平・加茂幸彦・辻森由美子(金沢大学埋蔵文化財調査センター)、佐々木達夫・高浜秀・藤井純夫・笠井純一(金沢大学文学部)、多樫正芳・柳生俊樹・西森正晃・大浦亮介・田中範裕・岩田和子(金沢大学院生・学生)